
クリスマス・キャロル

コウタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマス・キャロル

【Nコード】

N1636K

【作者名】

コウタ

【あらすじ】

クリスマスも独り執筆する作家、健一。

独身の女性編集者と、その息子との関係が変わっていく。

街は痛いほど冷たい空気に覆われていた。いくつもの建物の向こうからはオレンジ色の光が放たれ、夕闇が少しずつ街に浸透してきていた。今日はクリスマス・イヴ。人々はクリスマスの準備のために、またクリスマスを楽しむために、街を歩いていた。小さい子どもは両親と手を繋ぎ、おそろいの赤のマフラーを巻いた若いカップルが幸せそうに肩を並べて歩いていた。大きなクリスマスツリーのイルミネーションが光り輝き、ケーキ屋では子ども達が熱心にケーキを選んでいた。

この街はクリスマスの時期に雪が降ることはなかった。でもそのおかげで人々は精力的にあちこちへと動くことができた。野良犬もクリスマスを喜んでいるように走り回って通行人を驚かせた。サンタの格好をした人がギターを持って陽気に歌っていた。もし、かの有名なイギリスのイラストレーターがこの楽しそうな街を見たら、ウォーリーをこの街に紛れ込ませたことだろう。

クリスマス一色に染まる街の片隅に、とあるマンションがあった。その2階のある部屋で、仕事机に向かっている男がいた。こんなめでたい日にも、孤独な人間というのはいるものである。部屋のカーテンを閉め、クリスマスを一人で過ごすのを誰にも見られないようにする人間がいるものである。

35歳の小説家、谷口健一たにくちけんいちもそのような人間の一人だった。彼は毎年、クリスマスを一人きりで過ごしていた。彼は35年間、恋人がいたことがなく、両親はもうこの世におらず、一人っ子で兄弟も姉妹もいなかった。今日、彼は誰の家も訪ねないし、誰も彼の部屋を訪れない。

カーテンの閉められた部屋で、健一は一人机に向かい、ぼんやりとノートパソコンの前で想像をめぐらせていた。パソコン画面には新作の書きかけが映っている。

ふいに、部屋の片隅に置いてある電話が鳴った。健一は立ち上がり、受話器を取った。

「はい、谷口です」

電話は編集者からだった。彼女は健一の一年下で、息子はいるが、夫はいなかった。編集者は、ちよつとした事務的連絡を簡潔に済ませた。

「今日も仕事してるんですか？」と編集者は聞いた。

「ああ。他にすることもないからね。新作を書いていたんだが、どうも上手くいかない。主人公の男がクリスマスのデートをする場面が上手く書けない。私はそんなことないんだから」

「それじゃあ、『デートごっこ』でもしてみますか？」と編集者の理砂りすだがいった。「明日ちようどクリスマスだし」

「『デートごっこ』？」と健一はいった。「君の彼氏にばれたら

」

「今、彼氏はいませんよ」と理砂は『デートごっこ』くらい何でもないですよと言わんばかりにいった。

「でも、いいのか？ 私なんかと」

「『ごっこ』ってことを忘れなければ」

「そうか。それじゃあ、よろしく頼む」

そして二人は待ち合わせ場所を理砂の提案したフレンチ・レストランにして、待ち合わせ時間を昼の12時に決めた。

健一は受話器を置くと、ソファーにどっかりと座った。そして、生まれて初めてのデートに何を着ていくべきかと考えた。健一は長身で、スマートだった。私はデート用の服など持っていないが、いつもの格好でいいのだろうかと考え、今の格好に目を落とした。地味なセーターに地味なズボン。他の服にしても、大差ないだろう、こんな感じでいいか、と思った。

翌日の昼、健一はフレンチ・レストランの前で待っていた。待っている間、楽しそうに歩く人々が健一の前を通り過ぎていった。ふいに健一の周りに人々が増えて賑やかになったかと思うと、またし

んと静まるのだった。

加藤理砂がやってきた。健一は女のファッションなど分からなかったが、理砂がデートを特別意識した格好でないのは分かった。理砂は小柄で、年の割には若く見えた。理砂の横には、息子の調しらべがいた。

「健一さん、こんにちは」調が明るく挨拶をした。

調は13歳、健一の小説のファンで、健一の作品は全て読んでいた。

3人は店員に案内されてテーブルについた。健一の向かいに親子が座った。テーブルの上に小さいサラダが運ばれてきた。

「健一さん、次の新作はどんなになるの？」と調がきいた。

「ああ、サスペンスなんだが、クリスマスに恋人とデートしている間に、恋人が自分を殺そうとしていることに、だんだん気付いていて、ていう話なんだ」

「へえ、おもしろそう」

「男が女を殺すの？」と理砂がいった。

「いや、女が男を」

「そういう役割」

「そこまでは演じなくていいが」

「分かってる」

三人がサラダを食べ終わると、次の料理が運ばれてきた。

「おいしそう」と親子はいった。

ブイヤベースというフレンチの海鮮スープには海老や白身の魚やハマグリ、蟹などが入っていて、おいしそうに湯気を立てていた。

健一は黙々と食べ始めた。

「今日はデートごっこでしょ？」調がいった。「これじゃあただの食事だよ」

（何で息子を連れてきたんだ？）と健一は思った。

「まあ、いいじゃない。私の殺意に彼は少しずつ気付いてるのよ」といって理砂は笑った。健一も笑いながら、理砂もデートに慣れて

いないんじゃないかという気がした。

健一は何か話そうと思ったが、言葉が見つからず、またスープを口にはこんだ。

「健一さんはデートしたことないの？」と調がいった。

「ないよ」

「一回も？」

「ああ、一回も。モテないんだよ」

「そうですか？」と理砂がいった。「見た目の印象は悪くないから、もっと社交的になればいいんじゃないですか？」

「努力するよ」

スープを食べ終わり、健一はいった。

「君はどうなんだ？ その、新しい恋人っていうか、こんな事聞いているかわからないが」

「いいですよ、デート中なんですから。ん？ デート中だったら変か」といつて理砂は調と笑った。「恋人はつくらないです。もう結婚しないつもりです」

「そうか」

食事が終わると、健一は理砂達と別れた。正直いって、あまり参考にならなかった。調の言ったように、ただ食事をしただけだった。彼はクリスマスの昼の街を一人きりで歩いた。幸せそうな人たちが彼の近くを通り過ぎる度に、どれほど彼には遠く感じたことか。ただ、いつもと違って、どこか暖かさを感じていた。

健一は部屋に戻ると、再び机の前に座った。一応クリスマスのレストランの雰囲気は分かったので、それを参考に新作の書きを書いた。そうしている内に空は明るさを失っていき、星が現れ始めた。

時計が7時を回った頃、ドアのベルが鳴った。ドアを開けると、調が立っていた。

「何かな？」と健一はよそよそしくいった。

「母とケンカしたので、ここに逃げてきました」

「ここは避難所じゃないぞ」

「少しでいいので、居させて下さい！」

健一は仕方なしに調を中に入れ、ソファーに座らせた。

「何があつたんだ？」と健一は仕事机の前でいった。

「家に遊びに来てた僕の恋人が帰ったとたん、その子の悪口言うんだ。「あんな子は別れた方がいい」って」

「なるほど」

「ま、大丈夫ですよ、心配しないでください」

「ああ」健一はパソコン画面を向いた。

「僕も小説家になりたいなあ」調はソファーに身を沈めていった。

「そうかい？」

「うん」

「たくさん読んでたくさん書くことさ。ローマは一日にして成らずというだろう？」

「うん」

しばし、健一のキーをたたく音だけが響いた。

「戻った方がいいんじゃないか？」ふと健一はいった。「ごちそうが冷えるよ」

「健一さんは？」

「私はどうもしないさ、いつもと同じだよ」

「クリスマスなのに」

「いいんだよ、私はキリスト教徒じゃないんだから」

「そんなのみんな同じじゃないですか」

「とにかく、もう帰りなさい」

「健一さんも来ればいいのに」

「まさか。食事をもう一人分用意できるかね？」

「うーん」

電話が鳴った。健一は受話器を取った。

「はい、谷口です。ええ、居ますよ。これから帰ろうとするところです」

受話器を置いて健一は調にいった。「さ、もう帰ろう」

調は立ち上がった。いった。

「それじゃ、健一さん、よいクリスマスを」

「ああ、よいクリスマスを」

調は帰っていった。健一は一息ついた。部屋はしんと静まりかえっていた。

健一は疲れを感じ、ソファーに座った。ふと眠気が襲って、彼は夢の中へと入っていった。

調が昼の街中を女の子と歩いている光景が見えた。

(デート中か)

公園の入り口前で、調がクリスマス・プレゼントを女の子に渡した。女の子は喜んだ。調は女の子を抱きしめた。

二人は手を振って別れた。一人になった女の子が公園に入っていた。公園のベンチに座っていると、別の男が現れた。女の子は笑顔で彼と手をつないだ。

(ハハ、調のやつ、一杯食わされたな)

目が覚めた。健一はパソコンの時計で今日の日付を確かめた。1月25日、まだクリスマスの夜だ。彼は夕食を済ませると、また仕事机に向かったが、すぐにまた眠気が襲ってきたので、もう寝ることにした。

ベッドに上がる前に照明を落とすと、静けさと闇がクリスマスに幕を引いたようだった。

26日の午後、調は友人達と公園でサッカーをしていた。公園の時計が午後4時を指すまで、白い息を吐いて走り、サッカーボールを蹴った。調達はサッカーを終えると、公園から出て別れた。調がひとり帰り道を歩いていると、ふと、道の先にある古本屋から健一が出てきた。調は歩行者にぶつからない程度に走って健一の方へ行った。健一は気付いて振り向き、調を待った。

「健一さん、こんにちは」

「こんにちは、サッカーをしたのかい？」と健一は調の持っているサッカーボールを見ていった。

「うん。健一さんは、何を買ったの？」

「チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』という本だよ」といって健一は、本を見せた。

「わ、英語だ」「調は英語で書かれたページを見て感心し、それから何かを思いついたように顔を上げた。「健一さんのところよっていつてもいい？」

「いいけど、お母さんに電話してからだよ」

「僕は携帯電話持ってないよ。お母さんは僕に携帯を持たせないようにしてるから」

「そうか。じゃあ、私がしておこう」といって健一は携帯電話をポケットから取り出し、理砂にかけた。連絡が済むと、二人は健一の部屋に向かった。

「健一さんは結婚しないの？」

ソファーに腰掛けた調が、同じソファーに腰掛けた健一にいった。「まあ、しないだろうな。何も私は結婚しないと決めているわけではないがね。でもね、結婚相手が現れないのは、私が作家になった代償なんだと思うよ。私は、そんなに多くの幸せを手に入れる程の人間じゃないんだよ」

「ふうん」「調はコーヒーを口にはこんだ。

「私にしてみれば、作家になれたことで大満足なんだよ。きっと、それ以上を望まない方がいいんだ。もし神様がいるなら、私にそういうだろうよ」

健一は素晴らしいながら、コーヒーカップの中で、スプーンをくるくる回していた。

「もう溶けてるんじゃないの？」

「ああ」健一はカップからスプーンを出して、コーヒーを飲んだ。「神様つていると思う？」と調がきいた。

「どうかな。ある信者からもらった手紙によると、私は小説に書いてはいけないことを書いたために、もう救いようもなく地獄に堕ちるらしい」

健一と調は笑った。

「そういえば、健一さんの作品に『蘇り』っていう作品があったね」と調はいった。「人間が死んだ後、魂はどこに行くんだろうって主人公が考える話。でも、最後まで結論は出なかったね。来世ってあるのかな？」

「どうだろう。でも、人生は一度きりだと考えておいた方がいいんじゃないか？ だって、死んだ後何もなかったら困るじゃないか」「うん、そうだね」何もなかったら困ることもないだろうなと思いつつ、調は言わなかった。「でも、どうしてそういうテーマの小説を書いたの？」

「ある時、私はずいぶん自分の人生がいやに思えてな。生まれ変わったら、全く違う人生を歩めるのかな、と思ったんだ。結局、あの作品は何が言いたいのかわからないと言われたがね。もちろん、私は批評されることはかまわないよ。私としても、もう少し明確な作品にしたかったんだよ。でもなあ、もし読者が私の小説を読んで、死後の世界に望みを託すようになったらどうするんだ？」と、健一は議論をしているような言い方であった。「生まれ変わりに望みを託して自殺してしまう読者もいるかも知れないし、今の人生に投げやりになったりしてしまう読者もいるかも知れない。だったら、そんな小説を書く意味があるのだろうか」そう独り言のようにいいながら、健一は半分になったコーヒートをまたスプーンでかき回していた。「だから、ラストは曖昧にしたんだよ」

健一はそういつて表情を和らげた。

その日、理砂は不眠症を治してもらいに病院に行った。薬をもらってアパートに帰ったところで、調が健一の部屋によるという電話を受けたのだった。理砂が帰ったときの誰もいない部屋は、空気が冷えて寒々としていた。

調が2歳の時、理砂は離婚した。元夫が理砂に態度で伝えていたことは、女は男に黙って従っているのが一番の得策らしかった。直接そういう言葉で言われたのではない。徐々にそうした圧力が強くなっ

ていったのだ。ある時、彼女はそれを拒否した。

一年は残りの少ない時を刻んでいった。

人々はそれぞれの過ごし方で、その時間を過ごしていた。そして人間がどのような過ごし方をしているにせよ、空は大きな雲を創り、あるところでは雪を降らせ、あるところでは青空を人々に見せた。そして地球上にいる何千万という生物種も、それぞれのし方で、時の中を過ごしていた。

「明けましておめでとう、健一さん！」

正月になると、調と理砂が健一の部屋に来た。

「明けましておめでとう」健一はやわらかい表情でいった。「座つてくれ、今甘酒を入れるから」

部屋には、午前中の光が差し込んでいた。三人はソファーに座り、低いテーブルに載せた甘酒を飲みながら話した。

「恋人と初詣に行ったか？」健一は調にきいた。

「ううん、もう別れたよ。浮気してたんだもん」

「そりゃ残念だったな」

「だから、あんな子やめた方がいいっていったのに」と母親はいった。

「そんなの、今だから分かるんだよ」と調。「健一さんの小説に出てくるような女性はいないかな」

「（いないだろうな、私の妄想なんだから）ああ、きつとどこかにいるだろう」健一はそういつて甘酒を口にはこんだ。

理砂が何か健一の心情を探るような目で見ていた。健一がその視線に気付くと、理砂は目を背けた。

調がトイレに行くと、健一はソファーに身を沈めて、窓の外を眺めた。

「最近、元気がないんじゃないですか？」と理砂がいった。

「僕は大体いつもこんなもんさ」

「昔はもっと明るかった、と思う。最近はいつも沈んでいるみたい」

「そりゃあね。色々あるよ。自分の作品が大して売れないとかね。でも、人生つてこんなもんだらう？」

「ずいぶん愚痴っぽくなったものですね」

「私ももう35だからね」

「まだ35じゃない」

「年とると愚痴っぽくなるの？」と戻ってきた調がいった。聞こえていたらしい。

「私はね」と健一は答えた。

「ふーん」

しばらくして、親子は帰っていった。

健一は、ソファーに座り、テレビを点けた。が、すぐに退屈して消した。

一人きりの部屋で自分を振り返った。日々の生活に大きな変化はここ数年訪れなくなった。自分の小説が売れるか、売れないかという心配を抱えながら日々を送ることに慣れた。それは十代のとき、テストの点数が良くなったり悪くなったりすることに慣れていったのに似ていた。そうしているうちに、生活は単調になっていった。

(これでいいんだ。きつと)

窓の外には、一つの葉もついていない枝が揺れていた。

その日の午後、理砂は同僚の家に、調は同級生の家にそれぞれいた。調の同級生の名は良介、小学生の時から友人で、調と共に美術部に入っていた。二人は他に誰もいない、良介の部屋でひそひそ話を始めた。

「おまえ、いつすずか涼夏と別れたんだ？」と良介がいった。

涼夏は調のつき合っていた相手だ。

「27日。浮気が発覚したから」と調は答えた。

「またか」

「またかって？」

「実は前、俺も涼夏とつき合ってたんだ。そしたら、浮気されてさ」

「誰と浮気してたの？」

「調」

「え！ 知らなかったよ」

「涼夏、1学期の時、誰かに浮気されたらしいよ。それから涼夏の方が浮気をするようになったって。もう5回ぐらいしてるらしい」

「本当？」

「わからない。女子達が言ってた」

調は、もし本当なら、涼夏は男の僕に仕返しをしたのだろうかと思っただ。でも、ただの噂話かもしれないと思っただ。

元旦の翌日、健一は筆が進んでいた。頭の中に、次から次へとアイデアが浮かんできた。健一は主人公の恋人に身震いしつつ、悲劇と喜劇の入り交じるサスペンスを書いていった。

夕日が部屋に差し込んだ頃、ドアのベルが鳴った。なんとなく予想した通り調だった。

「今日はどうした？」

「母とケンカしまして」

健一はまた調を部屋に入れた。健一はキッチンに行った。

「甘酒はもうないな。コーヒーか紅茶か」

「あ、お構いなく」といいながら調はソファアに座った。

「何があっただ？」紅茶を入れながら健一はきいた。

「僕にも分からない。急にかんしゃくを起こすんだもん」

（もしかして、最近私の小説の売り上げが落ちてイライラしているのか？）健一はそう思いながらカップにお湯を注いだ。

「もう帰りたくないなあ」調はため息をついた。

調はふと本棚を見て、立ち上がった。

「この小説、僕好きなんだ」

調が手にしたのは、健一が3年前に書いた『仲間』という小説だった。

「最後の締めくくりがすごく好きなんだ。『この世が愛で満ちます

ように!』」。

健一は、3年前の自分からそんな言葉が出てきたのだということに、驚きを感じた。健一はソファの前の低いテーブルに紅茶を二つ置いた。調が本を本棚に戻して、またソファに座って紅茶を飲んだ。

「おいしい」と調がいった。

「そりゃよかつた」

「特別な紅茶？」

「ただのティーバッグだよ」

「でも、あつたまる」

健一は微笑んだ。

電話のベルが鳴った。健一が出ると、理砂だった。

「調はいる？」

「ああ、いるよ」

「さつさとこつちに帰らせて」

健一は調の方を見た。調は顔を横に振った。

「帰りたくないようだが」

「帰らせて」

「何があつたんだ？」

「調ったら、13歳にもなってまだニンジン食べられないのよ」

「ニンジン？」と聞いて健一は調の方を見た。

調は「へ？」という顔をした。

「いいから、早く帰らせて!」

ガチャンと乱暴に電話が切れた。

「おかしいでしょ？」と調。

「ああ」

「時々こうなるんだ」

二人は黙った。健一は机に戻った。

「健一さん、母と話してくれますか？」

「私が？」健一は調に顔を向けた。「何を？」

「分からないけど、何かを」

「私は精神科医じゃないぞ」

「でも、いつも小説でたくさんの人を救ってるでしょ？ たくさんの読者の心を治してるでしょ？」

「調 私は君が思ってるほど、たいそうな人間じゃない。私に人の心を治すことはできない。私にできるのは、もっともらしげな事を紙の上に書くことだけだ」

「嘘だ。健一さんの小説はそんなんじゃない」

「いや、そうなんだよ。僕がどういう人間か分からないのか？ 僕が人に人生を教え、心の持ち方を教え、そういうことができる人間だと思っつか？」

「うん。だって、いつもしてるじゃないか」

「調、それはそう見せていただけなんだよ。本当の私はいつも臆病で、本当の自分を人に見せないようにしてきただけなんだよ」

「嘘だ」

健一は、まだ13歳の子どもにこんなことを話している自分が愚かしく思えてきた。

「いや まあ、いい。ともかく、もう少し待ってみよう、君の母さんが落ち着くのを。 うん、待とう。電話が来るかも知れない」

15分ほど待った時、健一は電話などとても来そうにない気がしてきた。いつまでも人の子どもを帰さないでおくのも、まずい気がした。

健一はパソコン画面を眺めた。書きかけの小説の続きを考えようとしても、集中できない。健一は目を閉じ、しばし理砂を思い浮かべた。

「わかった。私と一緒にいこう」健一は立ち上がった。

「本当？」調はパアツと明るい表情になった。

「ああ。話し合ってみる」

健一はノートパソコンを閉じ、コートを取って玄関に向かった。調も付いていった。

外に出ると、辺りはもう夜で、空では月がぼんやりと浮かび、周りの雲を照らしていた。駐車場に行き、二人は車に乗り込んだ。健一は車を出発させた。

クリスマスで賑わった通りは、正月のためにほとんどの店が閉まって、ずいぶんと静かになっていた。バックミラーでチラと見えた調の顔には不安が浮かんでいた。

理砂のアパートに着くと、駐車場に車を止め、健一は調にいった。「君達の部屋はどこかな？」

「1階の、105」

「わかった。調はここで待っていてくれ。私が話して来るから」「うん、わかった」

調を車に残して健一は運転席からでた。理砂の部屋へ向かいながら、理砂と話すための、何の言葉も用意していないことに気付いた。105号室のドアの前に立ち、ベルを鳴らした。鍵を開ける音がし、ドアが開いて理砂が顔を見せた。

「調はどこですか？」と理砂がいった。

「他のところにいる。ちよつと二人で話したいんだが」

理砂は健一を怪しみながら、彼を中に入れた。リビングに入ると、二人は立ち話を始めた。

「なんだか、精神的に不安定らしいじゃないか」と健一はいった。

「別に、そんなことないけど」

「何があつたんだ？」

「何があつたというわけじゃないの。日頃から鬱憤がたまつてた。

私はあの子を一生懸命育ててあげてるのに、あの子は少しも私に感謝なんかしない！」

「そんなことないだろう？」

「何であなたに分かるの？ 私の苦勞なんか何も知らないくせに」

沈黙が訪れた。理砂は視線を床に落としていたが、我を取り戻したように、少し恥ずかしそうに顔を上げた。

「ごめんなさい」と理砂はいった。「もう大丈夫です。調を呼んで

きて下さい」

健一は理砂の様子を見て少し安心し、まだ何かを言いたそうに、行こうとしなかった。

「どうしたんですか？」と理砂はいった。

「調を連れてくる前に、少しだけ伝えたいことがあるんだ」

健一が真剣な声でいったので、理砂も真剣に健一の言葉を待った。

「もしよかったら」健一がいった。「私と一緒に生活をしませんか？ その 君を愛しているんだ」

「 調のためにそんなこと言ってるんですよ？ 」

「いや、本当だ。君を本当に愛しているんだ」

理砂は硬直したように、ただ健一の目を見ていた。

「結婚おめでとう！」急にドアが開いて調が入ってきた。健一と理砂は驚いて、笑った。

その日、健一と理砂は恋人同士となった。翌日、健一と理砂は調を連れて、もう一度食事へ行った。健一も理砂もデート用の服など持っていなかったが、二人にとっては何の問題もなかった。そして春が訪れ、夏が過ぎてまた冬となり、再びクリスマスが訪れたとき、理砂と調と健一の3人は、幸せにクリスマスを祝った。

そして、さらにその後、二人は結婚した。

ある批評家は、谷口健一は結婚してから作品が悪くなったと言ったが、健一は言わせるがままにしておいた。ある信者の送ってきた手紙には、健一の結婚は神の教えに反すると書いてあったが、もし見えるなら、二人の愛はたくさんのお天使達が祝福していただろう。

どんなに孤独な人も温かい愛に触れられますように。そして、健一が書いたように、この世が愛で満ちますように！

(後書き)

チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』は大変多くの人に愛されている作品で、最近ディズニーも映画化しています。私はディケンズの『クリスマス・キャロル』を読み、その感動から、自分でもクリスマスの作品を書いてみたいと思いました。そうして生まれたのが、私の『クリスマス・キャロル』です。

お読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1636k/>

クリスマス・キャロル

2010年10月8日15時04分発行